天理教
江南支部だより

発行先　江南支部
発行日　立教189年6月1日
発行責任者　九里正昭
発行住所　甲賀町神1750番地の１
6月号　N0309

「おさしづより」

我がさえよくばよいという心があるから、こういう理になりて来る。どうでもこうでも人間の心では行かんで〳〵、行くならこの道とは言わん。精神一つの理が世界鮮やか明らかのもの。この理より無い。

（明治30・11・13）

恒例の「全教一斉ひのきしんデー」が４月29日、「『かしもの・かりもの』を心に一手一つにひのきしん」をテーマに、国の内外で実施された。

江南支部は、今年も組ごとに開催した。甲賀組はＢ＆Ｇ海洋センターで、甲南組は地域市民センターで、信楽組は（特養）信楽荘を会場に報恩感謝のよろこびの汗を流した。

甲南組は、５月16日（特養）やまなみ工房でも草刈りを中心にひのきしんを行った。各会場とも笑顔があふれるひのきしんデーとなった。

全教一斉ひのきしんデー開催

だけど有難い
病は気から？

深谷善太郎著

病気という言葉は、「気を病む」と書きます。「病は気から」と言いますが、確かにそういうところがあって、たとえば薬ではない物でも薬だと信じて飲めば、何パーセントかの人には効くそうです。

アメリカ西海岸のある病院で、こんな調査が行われました。病気が回復するようにお祈りをしてもらっている患者さんと、そうでない患者さんの病状の変化を比較して統計を取ったのです。すると、お折りをしてもらっている人たちのほうが、明らかに良くなる率が高いという結果が出たそうです。それでも考えようによれば、「病は気から」で、薬ではない物を薬と信じて効能があるのと同じと言えるかもしれません。

しかし、同じ調査で、この病院のある西海岸から遠く離れた東海岸の人たちが祈り続けた場合も、同じ結果が出たそうです。しかも、祈られた患者さんたちは、自分が祈られていることを知らなかった。これは不思議です。

理由は科学的には分からないので、もっと調査をしなくてはならないそうですが、おそらく、調べても答えは出ないでしょう。それは、人間をお創りくだされた親神様が、祈る人々の真実をお受け取りくだされたからだと思うのです。

河原町大教会では、月次祭の祭典後、希望する参拝者におさづけの取り次ぎをしています。これは、この世と人間をお創りくだされた親神様に直接お願いするのですから、こんなに心強いことはありません。実際、有難いことに、毎月、不思議なご守護を頂戴した喜びの声を直接聞かせていただいたり、お礼状を頂いたりするようになりました。

偽薬でも、その気で飲めば「病は気から」程度には効くのです。おさづけの取り次ぎは親神様から直接ご守護を頂くのですから、「本当にたすかるのだろうか」などと疑っていたのでは、せっかく「たすけてやろう」と思っておられる親神様が「たすけられない」ということにもなりかねません。本気で信じて、もたれて、ご守護を願っていただきたいのです。

「稿本天理教教祖伝逸話篇」に、「子供が親のために」というお話があります。お道の草創期の先人の一人、桝井伊三郎先生がまだ若いころのこと、病気で危篤状態の母親をたすけていただきたくて、教祖のところへお願いに行かれました。しかし、教祖は「せっかくやけれども、身上救からんで」と仰せになりました。

教祖が「救からん」とおっしゃるのだから仕方ない。そう思って、伊三郎さんは家に帰りました。しかし、苦しむ母の姿を見ると、それでもたすけていただきたいという気持ちでいっぱいになって、再び教祖のところへ行き、「ならん中を救けて頂きとうございます」とお願いしました。けれども、教祖は重ねて「伊三郎さん、気の毒やけれども、救からん」と仰せになりました。

教祖が二度にわたって「救からん」とおっしゃるのだからと、そのときは得心して家に帰ったけれども、伊三郎

は母の苦しむ姿にどうしてもジッとしていられませんでした。三たび、教祖のところへ行って、「ならん中でございましょうが、何んとか、お救け頂きとうございます」と、お願いしたのです。すると、教祖は「子供が、親のために運ぶ心、これ真実やがな。真実なら神が受け取る」と仰せくださり、お母さんは鮮やかにご守護いただいて、八十八歳まで長生きされたということです。

この姿勢が大事なのです。

私たちは、どうしても合理的・論理的にものを考えようとします。科学を信仰しているようなところがあります。お医者さんに「だめだ」と言われたら、がっかりして、神様から宣告を受けたような気になって諦めてしまう。しかし、お医者さんは神様ではありません。最近、病院でも「病気と明るく闘おう」とか「病気と共に生きよう」などと書いたポスターを貼っているところがあります。それはなぜか。暗い気持ちで後ろ向きに生活するより、明るく素直な人のほうがたすかりやすいということが統計的に分かってきたからです。では、どうしたら明るく生きられるのか、どうしたら前向きに生きられるのか、その方法は病院では教えてくれません。

私たちは、本当の人間の生き方、陽気ぐらしの生き方を知っています。そして、親神様を信じ、心を入れ替えることで、ご守護が頂けることを知っています。こんな有難いことはないのです。

『みちのとも』より一寸いい話
日々、教祖と一緒ににをいがけ

小寺悦子　よふぼく

平成15年、埼玉県に住んでいた私、1歳の息子と散歩中に、同じく子連れの若いお母さんからにをいを掛けていただきました。その方は、やんちゃそうな見た目に反し、わずか信仰1年にして徹底して教祖のひながたを歩んでおられる最中でした。その格好良さに憧れて、私は今日までこの道を通ってきたのだと思います。

所属教会に初参拝した日、前会長夫人から「あなたはこれから、新しい小寺家を築くのよ」と言っていただきました。そして「どんな中でも通っていけるように」と、修養科を出させてもらいました。

21年、主人が親の稼業を継ぐことになり、三重県の主人の実家に引っ越しました。主人は大きな負債を引き受け、家庭内は緊迫感で息もできないような状況に。前会長夫人の「どんな中でも」という言葉の深い意味合いが、ずっしりと感じられました。

教会から離れた地で独り、重い心を引きずってにをいがけに歩くなか、初参拝、初席、修養科へと進んでくださる方が2人できました。その一人、家庭の事情で悩んでおられたAさんが、ようやく修養科を志願されたとき、前会長夫人から頂いた温かいねぎらいの言葉が、まるで教祖のお言葉のように感じられ、ありがたくてもったいなくて涙が止まりませんでした。思えば教祖は、私がなんとか踏ん張り、通りきれるようにと、おたすけの御用を下さ

り、励ましてくださっていたのだと思います。

前会長夫人は常々、おたすけをしていんねんの切り替えをするよう促され、昨年、息子の事情を通して、その言葉が真に胸に治まりました。与えを喜ぶ心を定め、苦労に向き合う覚悟を決めてにをいがけに歩き始めると、どんな人との出会いも面白く思えてくるから不思議です。にをいは掛からなくても、親神様・教祖と問答しながら歩くなか、自分の癖性分にも気づくことができ、教祖の「楽しめ、楽しめ、楽しめ」というお声が聞こえてくるように感じます。

この１年で、教祖に喜ばせてもらうばかりでなく、少しでも教祖に喜んでもらえるよふぼくに生まれ替わりたい。そんな思いで日々、教祖と一緒ににをいがけに歩かせていただいています。

立教１８９年 滋賀教区婦人会員の集い

本年は１月に教祖１４０年祭がつとめ終えられ、その後の動きとして、婦人会本部より「～教えを伝えられる人に～」とのお声を頂いております。教祖がよろづたすけのために教えてくださった、かぐらづとめについて学び、周りの人に自信を持って教えを伝えていく力を身につけることを目指して、その一助となればと「滋賀教区婦人会員の集い」を開催させていただきます。

どうかお誘いあわせの上、一人も多くの会員がご参加くださいますよう、よろしくお願いいたします。

教区主任　中西はつよ

日時：６月３０日（火）
受付：午前９時３０分　午前１０時～午後２時３０分解散予定
場所：甲賀大教会
内容：講義　『おつとめについて』　栗田支部長　清水このみ先生
対話　お楽しみ行事など
参加お供え：１，０００円

７月支部ひのきしんデー

７月６日（月曜日）午前９時～１１時３０分
甲賀学園 鹿深の家　草刈りひのきしん

６月支部にをいがけデー

６月２８日午前９時～
拠点教会　大原市場分教会　甲賀町大原市場２２番地５